

粵方言区の日本語学習者に見られる発音問題

楊 詘 人

要約

粵方言區出身的日語學習者中常見的發音問題

楊 詘人

日語的音節不但少（只有一百一十個），而且其結構也比較簡單，因而往往有些外國人認為日語的語音很容易習得。其實不然，各國的日語學習者均因受其母語音的影響或干擾，他們所發的日語語音在一定程度上有所不同。即使是同一國家中操同一母語的人，亦因其日常所操方言的不同而有所異。

以中國粵（廣東）方言區出身的日語學習者而言，他們在學習日語語音時，就因受其母語方言的影響，他們所發的日語語音在某些方面與其它地區，比如北方方言區出身的不同。

粵方言區出身的日語學習者在日語語音的習得過程中最容易出錯的大致有如下幾種：一是サ行，タ行，ザ行中的某些音不易發準；二是ナ行音和ラ行音易于混淆；三是ガ行鼻濁音中的鼻音容易被脫落。

本文針對粵方言區出身的人在習得日語語音時所常見的這幾個問題，從普通話，粵方言及日語等的相關語音分析入手，盡可能找出他們何以產生這些問題的原因，並針對這些問題和原因，根據筆者的經驗，力圖找出解決這些問題的方法。

日本語には、音節が直音72（うち、清音44、濁音23、半濁音5）、拗音音節36（うち、清音21、濁音12、半濁音3）、撥音音節1、促音音節1と引き音音節1の、全部で111だけある¹⁾。その音節の構造は単純で、直音の場合はC+V（子音+母音）、拗音の場合はC+j+V（子音+半母音+母音）で、撥音、促音、引き音を除いて、全部母音で終わる。しかも、たとえば直音の場合、その発音は、行にはア、イ、ウ、エ、オ、段にはア、カ、サ、タ、ナのように、規則がある。全体として、日本語の発音は単純で、音節の数も他国語より、たとえば中国語の411音節よりはずっと少ない。したがって、外国人の日本語学習者には、日本語の発音は修得しやすいと思う人が少なくないように思われる。

理論的には確かにそうであるが、実際はそうでもない。それぞれの国の日本語学習者は、その母国語の影響ないし干渉により、多少ともこの単純なる日本語の発音を正しく発音できないケースが見られる。

また同じ国の日本語学習者にも、その国の違う方言区に育った人が習得した日本語の発音は、その方言差により、同一国の日本語学習者ではあるが、その発音は必ずしも同じではない。

中国における日本語学習者の場合、中国の8大方言区に育った者が日本語の発音を修得する時、その育った方言の干渉により、その発音は必ずしも一様ではなく、発音上の問題点もまたまちまちである。例えば、「サ」行音の「シ」と「ス」は呉方言区出身のものには簡単に修得できるが、粵方言区出身のものにとってはそれは一番の泣き所と言える。

この稿では、筆者が中国の大学で二十年近い日本語教育の経験により、中国南部における日本語学習者に見られる発音上の問題点、特に粵方言区（広東省）出身の日本語学習者によく見られる方言の干渉による発音上の問題点について考察したい。

一. 「サ」行, 「タ」行, 「ザ」行音の問題

「サ」行の「シ」と「ス」及び「ソ」と「ショ」, 「タ」行の「チ」と「ツ」, 「ザ」行の「ジ」と「ズ」の区別が付かないのは、粵方言区出身の日本語学習者が日本語の発音を修得する時によく見られる問題である。その中で一番問題になっているのは、「サ」行音の「シ」と「ス」及び「ソ」と「ショ」, 特に「シ」と「ス」の区別が付かないことで、しかも一番多く見られる問題点である。たとえば、「スズシイ」を「シジシイ」と発音したり、「スミマセン」を「シミマセン」と発音したり、また「私」を「ワタス」と言ったりするような例は枚挙に暇がないほどである。

次のことからなぜ、その「シ」と「ス」の区別が付かないかが伺えると思う。20年前、筆者が広東省仏山市のある食堂で食事をする時、ある客は「我要一個 [cikua] ([cikua] をお願いします)」とおかずを頼んだ。それを聞いた筆者は、「さすがに食は広東にあり、広東では西瓜もおかずにするのか」と不思議に思っていた。というのは、[cikua] は標準中国語では西瓜の意味で、中国では西瓜を料理にすることは聞いたこともないからである。しかし、後で出し

てきたおかずは、なんとへちまだった。標準中国語では、西瓜は漢字では日本語と同じく「西瓜」と書き、そのうちの「西」は歯茎硬口蓋摩擦音 [ɕ] と非円唇前舌狭母音 [i] とを合わせたもので [çi] と発音し、へちまは「絲瓜 ([sɪkua])」と書き、その「絲」は歯音 [s] と中舌狭母音 [i] とを合わせたもので [si] と発音すべきであるが、その人は「絲」を「西」のように発音してしまったのである。

日本語の「シ」は歯茎硬口蓋摩擦音 [ʃ] と非円唇前舌狭母音 [i] とを合わせたもので [ʃi] と読み、「ス」は歯音 [s] と狭母音 [ü] とを合わせたもので [sü] と読む。

日本語の「シ」は [si] と読むともいわれ、[çi] とする方がいいともいわれ²⁾、また、[ü] は中舌化しているもので、標準中国語の [i] の調音点は日本語の [ü] よりやや前寄りだが、すごく近い。全体として、標準中国語の「西」、「絲」の発音はそれぞれ日本語の「シ」、「ス」と似ているわけである。したがって、粵方言区の日本語学習者は、標準中国語の「絲 ([sɪ])」を「西 ([çi])」のように発音してしまうように、日本語の「ス ([sü])」を「シ ([ʃi])」と発音してしまうのである。

では、粵方言区出身のものはなぜこのような間違いをするのか、まず粵方言では、いったい「西」と「絲」をどう読むのかを考察する。

粵方言の子音には、歯茎硬口蓋摩擦音 [ɕ] や [ʃ]、それから歯音 [s] がいない。その代わりに歯音 [s] に近い硬口蓋歯音 [ʃ̥] (精密に言うと、この [ʃ̥] は中国語や日本語の [s] よりはやや後ろで、[ɕ] や [ʃ] にはやや近いがその前で調音する音素である³⁾) 一つで発音するもので、「西」は [ʃ̥ei] と、「絲」は [ʃ̥i] と読む。すなわち、[ʃ̥] 一つで標準中国語の歯茎硬口蓋摩擦音 [ɕ] と歯音 [s] を間に合わせるのである。簡単に言うと、粵方言の [ʃ̥] は標準中国語の [ɕ] と [s]、または日本語の [ʃ] と [s] の中間にある子音である。

次に粵方言の母音を見る。標準中国語の場合は、上述したように、「西」の母音は日本語の「シ」の母音と同じく、非円唇前舌狭母音 [i] で、「絲」の母音は日本語の「ス」の狭母音の [ü] よりはやや前寄りの中舌狭母音 [i] であるが、粵方言の場合、終わりの母音は全部前舌狭母音 [i] である。

標準中国語の「西 ([çi])」、「絲 ([sɪ])」をそれぞれ [ʃ̥ei], [ʃ̥i] と発音してしまうように、粵方言区出身の日本語学習者は日本語の「シ ([ʃi])」「ス ([sü])」を全部「シ ([ʃ̥i])」と発音してしまい、時にはまた全部「ス ([ʃ̥ü])」と発音してしまい、区別ができないわけである。(厳密に言うと、粵方言の [ʃ̥] が標準中国語や日本語の [ʃ] と [s] の中間にある子音だから、粵方言区出身の人が発音した標準中国語の「西 ([çi])」、「絲 ([sɪ])」や日本語の [ʃi], [sü] は全部それらの中間音になると思われる。)

一言敷衍するが、標準中国語では、「洗」は [çi] と読み、「死」は [si] と読むべきだが、粵方言区出身のものが、標準中国語で「洗」を言う時、往々にして「死」のように聞こえる。それで、彼らが発音した「シ」と「ス」は時には全部「シ」になったり、時には全部「ス」になったりするのである。

粵方言区出身の人が毎日このように発音するものだから、全然話したことのない、しかも毎

日使っている [ʃ^hei], [ʃ^hi] と似ている [ɕi], [si] をはっきり区別して発音するのがいかに難しいかは、想像も付くであろう。それで、彼らは無意識のうちに標準中国語の [ɕi], [si] をそれぞれ [ʃ^hei], [ʃ^hi] と発音し、同じ原因で日本語の「シ ([ʃi])」と「ス ([sɯ])」を全部「シ ([ʃi])」か「ス ([ʃ^hɯ])」と発音してしまうのであろう。

「シ」と「ス」が区別できないのと同じように、「ソ」と「ショ」も往々にして混同しやすい。その原因も、やはり上記の子音の問題によるのであると思われる。すなわち、「ソ」を発音しようとしても、粵方言には歯音 [s] がいないから、その代わりに [ʃ^h] で発音するから、「ショ」になってしまったのである。

次に「タ」行音の「チ」と「ツ」の問題だが、粵方言区の人々は、標準語の「吃」を読む時、往々にして「気」に聞こえ、よく北方出身の人の笑い話の種になる。標準中国語では、「吃」は「食べる」という意味で、反り舌音の [tʂɿ] と読み、「気」は「怒る」という意味で、[tʃi] と読む（両方とも有気音）。粵方言区の人々は標準中国語で「食べますか」という意味を [tʃi pu tʃi] と言う。この [tʃi pu tʃi] は、標準中国語になると「気不気（怒りますか）」という意味になってしまうのである。またたとえば標準中国語の「此」は [tsɿ] と発音すべきだが、粵方言になると、やはり [tʃi] になってしまう。すなわち、粵方言の子音には、反り舌音の [tʂ] もなければ、反り舌音でない [ts] もなく、全部 [tʃ] で間に合わせるのである。しかも、すでに述べたように、中舌狭母音 [ɿ] がなく、非円唇前舌狭母音 [i] だけであるから、[i] も [ɿ] も全部 [i] で代わって発音するのである。そういう原因で、粵方言区出身のものが「吃」を「気」のように発音するのである。

日本語の「チ」と「ツ」はそれぞれ [tʃi] と [tsɯ] と読むが、上述のように、粵方言には日本語の「ツ ([tsɯ])」に当たる音素がないため、「チ」も「ツ」も前述の標準中国語と同じように、全部「チ」で発音してしまうのである。

また、「ザ」行音の「ジ」と「ズ」が区別できない理由は同じく上記の子音と母音の問題にあることは想像が付くだろう。

さて、どうして粵方言区出身の日本語学習者が「シ」と「ス」、「ソ」と「ショ」及び「チ」と「ツ」の区別が付かないかという原因が分かったが、ではいかにして発音段階で日本語学習者に指導し、正しい発音を修得させるかを考えなければならない。

正しく発音するように指導するには、まず第一に母音の指導であると思う。「シ」の狭母音 [ɿ] は粵方言区にもあるから、問題がない。問題になるのは狭母音の [ɯ] である。この「ス」及び「ツ」と「ズ」の母音 [ɯ] は中舌化しているので、「ア」行の「ウ」の音 [u] とは少し違う⁴⁾ことを説明し、調音点を [u] より少し前へずらすようにして発音すると指導する。

次に子音の指導だが、前述したように、粵方言の [ʃ^h] は標準中国語や日本語の [ʃ] と [s] の中間にある子音であるから、日本語の [ʃ] と [s] が正しく発音できるように指導する場合、日本語の [ʃ] は舌が硬口蓋の近くに盛り上がって発音するように、また [s] は舌が歯茎のところへ向かって発音するようにと、図を書いたり、手まねをしたり、また、実際に発音して見せたりして調音点と調音の方法を詳しく指導する。しかも根気よく教え、何回も何回も例えば

「シル」と「スル」のような混同しやすい語を区別させながら繰り返し練習させるのである。

「チ」と「ツ」の発音指導についても、その母音は「シ」と「ス」と同じだから、もっぱら子音 [tʃ] と [ts] の調音法を指導していい。

[tʃ] と [ts] のうち、[tʃ] は歯茎音ではあるが、舌の盛り上がりが著しい。[ts] も歯茎音だが、舌が盛り上がりせず、平らにして、舌先を歯茎にくっついて発音するように指導し、かつまた発音器官の図を描いて、何回も何回も繰り返して発音して見せたり、訓練したりする。

言うのはたやすいが、実際に指導に当たってみると、これ以上難しい作業はないとつくづく感じる。

難しい作業ではあるが、このように指導して、大部分の学習者は「シ」と「ス」、「ソ」と「シヨ」、「チ」と「ツ」が正しく発音し区別できるようになるのである。しかし、いくら丁寧に、根気よく指導しても、なかなか直らない例がまだある。特に「シ」と「ス」の区別が付かない問題は、四年間通して日本語を勉強してもなお全然直らないものもいる。

二. 「ナ」行音と「ラ」行音との混同問題

次に粵方言区出身の日本語学習者によく見られる「ナ」行音と「ラ」行音の区別が付かない問題を取り上げたい。

何年前かは忘れたが、筆者が粵方言区出身のある日本語学習者と家族のことを標準中国語で話したら、彼は、「家には80歳の祖母がいる……」と言った。この「祖母」は、標準中国語の口頭表現では「奶奶」と言う。この「奶」は標準中国語では、[nai] と読むが、しかしその人は「奶奶」を [lailai] と発音し、「来来」（「来て」の意味）のように聞こえたのである。すなわち鼻音 [n] を側面音 [l] のように発音してしまうのである。

このような鼻音 [n] と側面音 [l] の区別が付かない、または付きにくい例は、粵方言区出身の人のみでなく、広西省、貴州省、湖北省、湖南省など、広く中国南部、西南部地域の人によく見られる。その中でも粵方言区出身の日本語学習者の場合は特に著しい。

しかし、粵方言をよく観察してみると、「シ」と「ス」など区別が付かないのとは違って、粵方言には、鼻音 [n] と側面音 [l] がともに存在している。それでもやはり標準語の [n] と [l] の区別が難しい。その原因は今の段階ではまだはっきり分らないが、粵方言を記述している『広州音辞典』⁶⁾ を調べてみると、収録字数約8500字の中で、鼻音 [n] で始まる音は約140字だけだが、側面音 [l] で始まる音は約500字もあり、圧倒的に多いのである。標準中国語ではかの子音で始まる字でも粵方言では [l] で始まるのだということが分かる。(約25000字も収録している『現代漢語詞典』⁷⁾ では、鼻音 [n] で始まる音は約200字で、側面音 [l] で始まる音は約640字である。) しかも、鼻音 [n] で始まる音と組み合わせてできた語のうち、前に他の字が付いてできた語が少なく、後ろに他の字が付いてできた語が多いのに対して、側面音 [l] で始まる音と組み合わせてできた語の場合、前に他の字が付いてできた語が多いということが分かった。これはおそらくその二つの子音の粵方言と標準中国語における前後の音声環境が違ふこと、すなわち自由異音や条件異音の関係にある⁷⁾ だろう。その辺はよく観察や研究をしてい

ないから、ここではこの考察を省くことにするが、次の現象と合致する。すなわち、鼻音 [n] で始まる音と側面音 [l] で始まる音は、単独では、それほど混同しないが、語や文の中に出た時、よく混同しやすいのである。

日本語の「ラ」行音の子音は弾き音の [ɾ] だが、標準中国語には反り舌音 [r] はあるが、弾き音 [ɾ] はない。粵方言には反り舌音 [r] もないし、弾き音 [ɾ] もない。それらと少し似ている側面音 [l] はあるが、鼻音 [n] とよく混同しやすいし、また、一部の教師も弾き音 [ɾ] は中国語の側面音 [l] と似ていると教えるから、多くの学習者は、側面音 [l] をもって日本語の「ラ」行音の子音として発音する。それで彼らの発音した「ナ」行音と「ら」行音があたかも標準中国語の鼻音 [n] と側面音 [l] を発音するように、区別できなくなり、また時には [n] が [l] になったり、時には [l] を [n] と発音したりするのである。

指導法としては、やはり前述したように、まず「ナ」行音と「ラ」行音の発音する時の舌の位置、口の形、呼気の仕方など調音方法をそれぞれ詳しく教えることである。が、その重点は弾き音 [ɾ] の正しい調音法にある。弾き音 [ɾ] は標準中国語にも粵方言にもないから、学習者にとっては難しい音と言える。具体的には、まず舌先を硬口蓋の方へ曲げて声を出し始め、それと同時に歯茎に一度打ちつけて有声弾き音を出すように指導する。

しかし、それで問題がすぐなくなり、正しく発音できるようになるわけではない。学習者がその指導を受けて発した音は2種類になる。一つは舌先を硬口蓋の方へ曲げたまますぐ音を出し、出た音が標準中国語の反り舌音 [r] または英語の [r] のように聞こえる。それは、「ラ」行音はローマ字 [r] で表記されているため影響されるのもその原因の一つである。もう一種類は、有声歯茎音の [d] になってしまう。それで、図を書いたり、手まねをしたり、調音法を詳しく説明したり、実際に発音して見せたりして、また例えば「イヌ」「イル」などを比較したりして何回も何回も根気よく指導する。このように時間をかけて訓練することによって、大部分の人の不自然でありながら、一応直されるが、まだごく少数の人はなかなか直らない。ひどいのは四年間通してもなお区別できない。

三. 「ガ」行の鼻濁音の問題

日本語の「ガ」行音は、語頭に現れる時は濁音と発音するが、語中や語尾、または助詞「ガ」などの場合は鼻濁音として発音する。

語中にある「ガ」行の鼻濁音が正しく発音できなく、「ア」行音のように聞こえる（そのうちの「ギ」はまた少し「ニ」のように聞こえることもある）のは、もっぱら粵方言区出身の日本語学習者に多く見られる現象である。

確かに日本人の間でも鼻濁音のない人が増えているようで、いつも子音 [g] で発音する人が多いという報告があるが⁹⁾、日本語学習者にはやはり鼻濁音が発音できるのは一番望ましいと思う。

粵方言区出身の日本語学習者に「ガ」行鼻濁音を教える時、はじめのところ、一音ずつ発音してもらおう場合でも「ガ」行鼻濁音は「ア」行音のように発音してしまうケースがある。

根気よく調音の方法を教え、繰り返し訓練して、今度一音ずつ発音する時は正しくできたが、単語や文に鼻濁音が出ると、すぐまた「ア」行音のように発音してしまうのである。

観察してみると、これもまた二. と同じように、粵方言には、軟口蓋音 [ŋ] がちゃんとある。たとえば「齒」という意味の「牙」は、粵方言では [ŋa] と読み、語頭に現れるが、また、[kap ŋaŋ]（「無理に」という意味）のように、語中にも現れる。このように、粵方言の場合、軟口蓋音 [ŋ] は語頭にも語中にも存在するにもかかわらず、日本語になると、前述のように、一音ずつの場合、鼻濁音が正しく発音できても、語中にある鼻濁音になると、すぐ「ア」行音のように聞こえるのである。

粵方言区出身の日本語学習者に見られるこのような現象が、いったいどうして起こるのかについては、前述した二. のように、おそらくは自由異音と条件異音の関係にあるかも知れないが、それについての研究をしていないので、原因の追究を省くことにする。しかし、《広州音辞典》を調べてみると、軟口蓋音 [ŋ] で始まる字は約200字（標準中国語の場合、たった3字だけ）あるが、そのうちの56字は、例えば「圧」を粵方言では [ŋad] と発音してもいいし、また [ad] と発音してもいいように、軟口蓋音 [ŋ] が脱落して発音することもできることが分かった。それは粵方言区出身の日本語学習者が、単語や文に鼻濁音が出ると、すぐ「ア」行音のように発音してしまう原因だとは断言できないが、一つ示唆を与えてくれたのではないかと思われる。

その具体的な指導方法についてだが、まず学習者に鼻音「ン」と「ガ」行音とを一つにくっついて発音させ、だんだんその中の [g] を脱落するように少し早く発音するように指導する。発された音ははじめのところは確かに少し聞きにくいだが、意識的にこのように発音する練習をさせ、一応安定するようになってから、今度はそのやり方で語中や文中での「ガ」行鼻濁音の発音練習をさせる。学習者がこのように一定の時間をかけて意識的に発音しているうちに、無意識的に発音しても自然な「ガ」行音が発音できるようになる習慣を覚えさせるのである。事実、このように意識的に発音するように努めるのが近道だと思われる。

以上は、もっぱら粵方言区出身の日本語学習者によく見られるいくつかの発音問題であるが、中国人の日本語学習者に見られる発音問題はそれだけではない。この稿の冒頭にも述べたように、同じ国の日本語学習者にも、その国の違う方言区に育った人が習得した日本語の発音は、その方言の干渉により、その発音は必ずしも同じではない。中国の8大方言区に育った者が日本語の発音を修得する時の発音上の問題点もまたまちまちである。実際にはたとえば、「エ」段音や拗音の問題、有気音と無気音の混同問題などがまだいくつか挙げられる。

なお、方言の干渉による発音問題のほかに、学習者の年齢の格差による日本語の発音もまた微妙な差がある。大学の学部学生の中の日本語の初心者には年齢的に考えると、大体18歳前後の若者で、しかも言語習得の能力が高いものだから、全体として指導しやすいが、社会人になると、その年齢にはかなりの格差があるので、早く修得し正しく発音できるものもいれば、いくら指導してもなかなか直らないものもいる。それについては、別の機会で考察したい。

説明：特に断らない限り、本稿に用いた音声記号は国際音声字母（1979年改訂されたもの）である。

注

- 1) 阪倉篤義編『日本語の基礎』p. 93, 旺文社, 1982年 8 月;
- 2) 服部四郎著『音声学』p. 88, 岩波書店, 1987年11月第 3 刷;
- 3) 黄皇宗主編『広州話教程』p. 5, 中山大学出版社, 1989年12月;
- 4) 今田滋子著『教師用日本語ハンドブック 発音』p.30, 国際交流基金, 昭和56年 5 月;
- 5) 饒秉才主編, 広東人民出版社, 1983年 5 月;
- 6) 中国科学院語言研究所詞典編輯室編, 商務印書館, 1973年 9 月;
- 7) 加藤彰彦他編『日本語概説』p. 42, 桜楓社, 1989年 3 月。
- 8) 今田滋子著『教師用日本語ハンドブック 発音』p. 40, 国際交流基金, 昭和56年 5 月。

(原稿受理1994年10月24日)